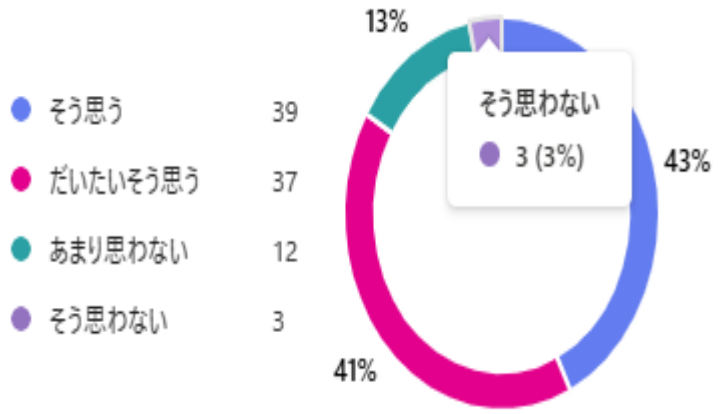
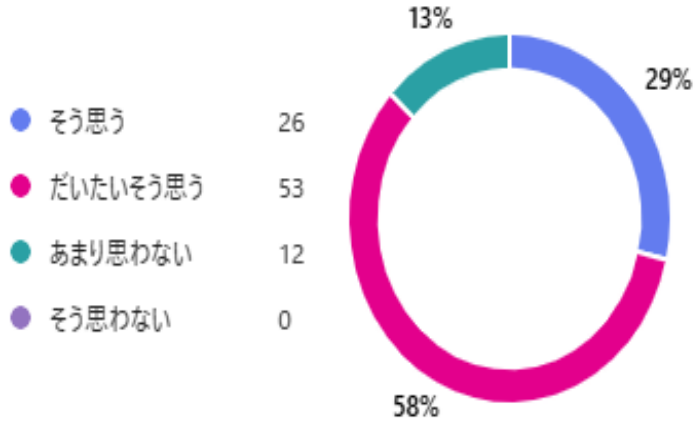
令和７年度　学校評価アンケート（保護者対象）　令和８年２月実施

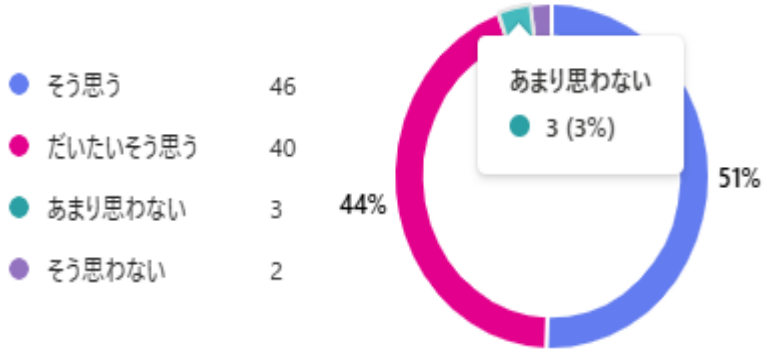
1．お子さんは、学校へ行くのを楽しみにしている。



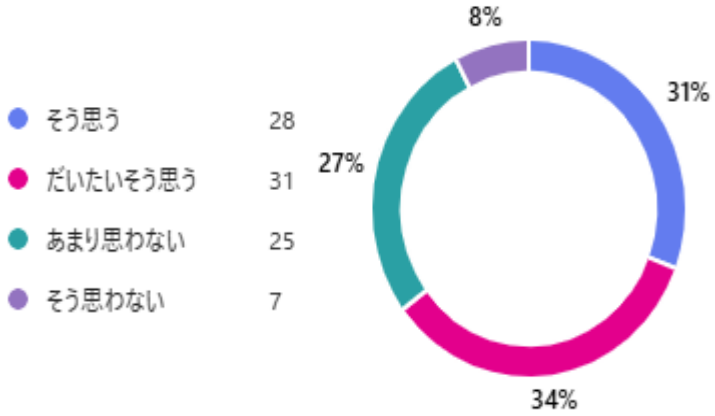
2．お子さんは、自分の「良いところ」がわかっている。



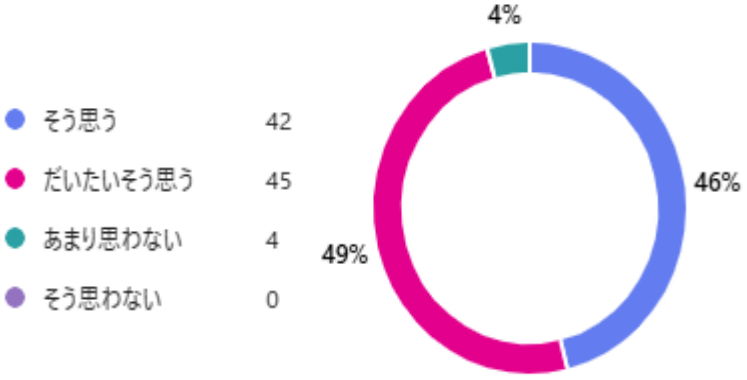
3．お子さんはルールやマナーを守って生活することができている。



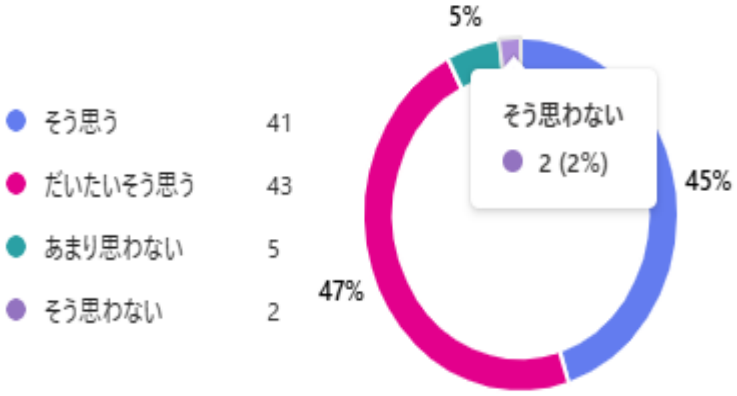
4．お子さんは、家庭で復習や宿題に取り組んでいる。



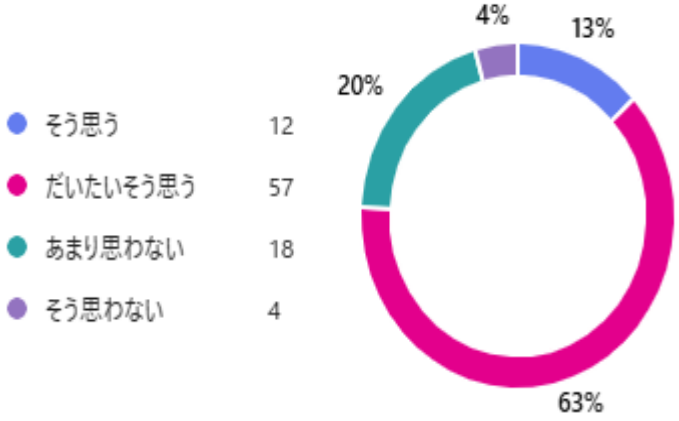
5．お子さんは、まわりの人や友達など、相手のことを思ったり、相手の気持ちを理解したりしようとしている。



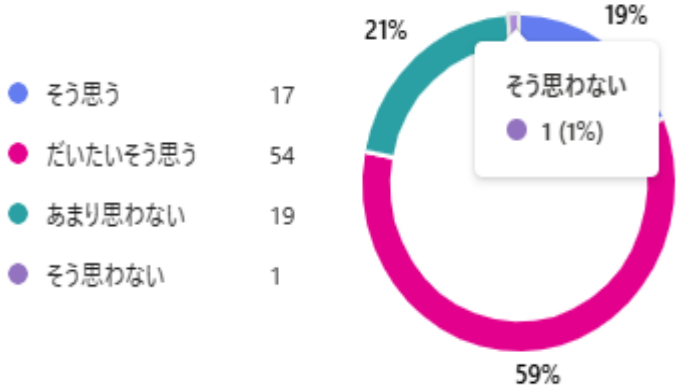
6．お子さんと学校のことについてよく話をする。



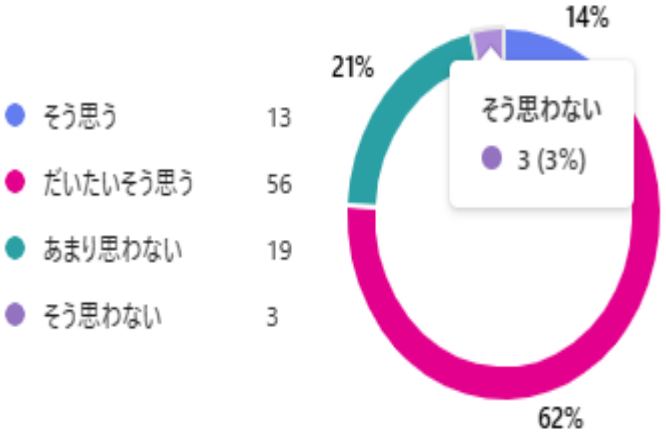
7．学校はいじめのない学校作りに取り組んでいる。



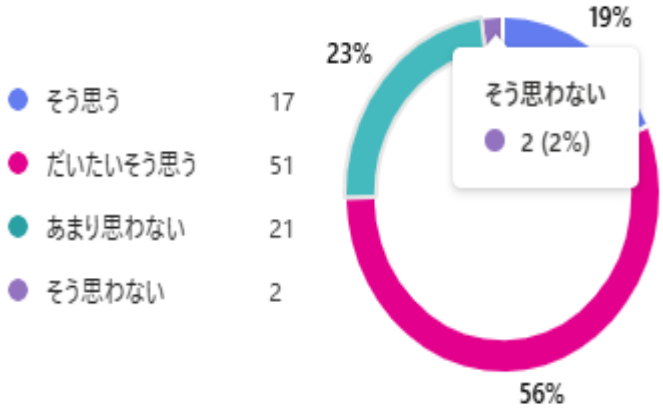
8．学校は、ICT 機器の活用など、新しい教育課題に取り組んでいる。



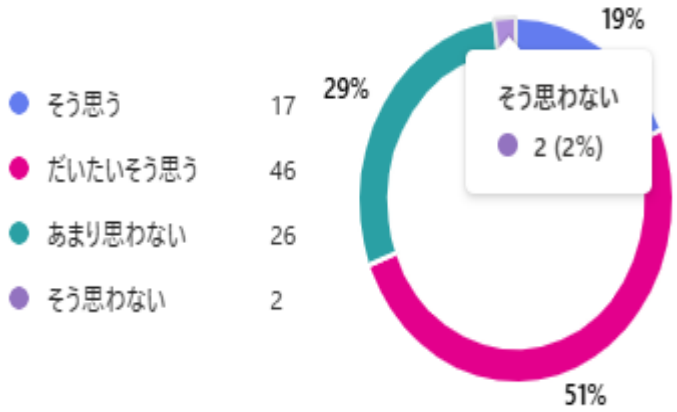
9. 学校は、学級や学校の様子を各種のたよりやホームページなどで積極的に家庭へ知らせている。



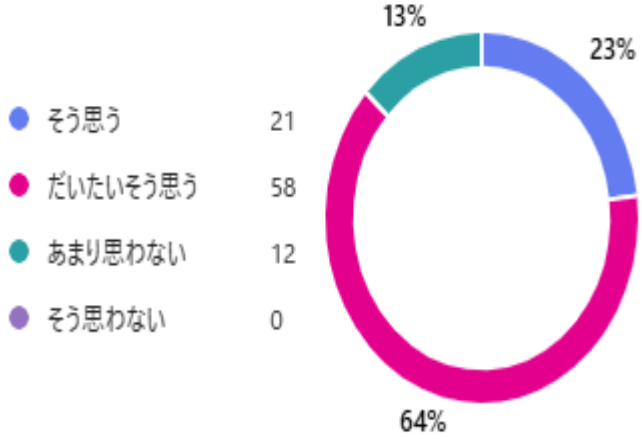
10. 学校は、子ども・保護者・地域の意見や要望に応え、改善に活かそうとしている。



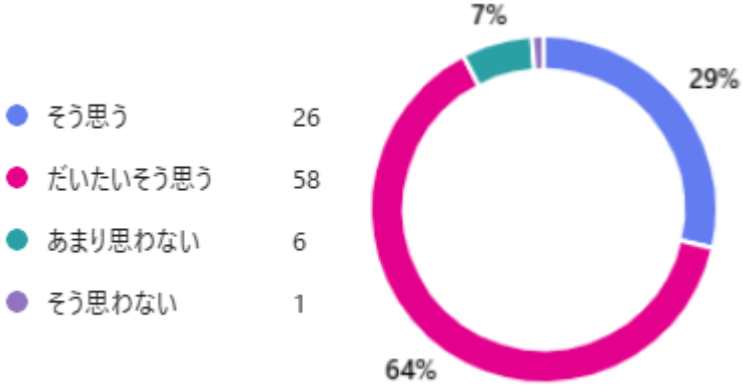
11. 学校は、子どもたちが将来の夢や進路、生き方や働き方について考えたり学んだりする機会を設けている。



12. 様々な体験活動や学校行事は、子どもたちにとって充実したものになっている。



13.学校は、子ども達が心身共に安全に過ごせるよう努めている。



令和７年度　学校評価アンケート（保護者対象）分析結果

― 今年度の成果と課題、次年度への展望 ―

１　今年度の成果

本校が実施した学校評価アンケート（保護者対象）の結果から、学校生活全般において、子どもたちが比較的安心して学校に通い、基本的な生活習慣や人間関係を大切にしながら生活している様子がうかがえる。

特に、「学校へ行くことを楽しみにしている」「ルールやマナーを守って生活している」「周囲の人の気持ちを考えようとしている」といった項目からは、日常の学校生活において、落ち着いた環境づくりや、互いを認め合う指導が一定程度成果を上げていると考えられる。

また、いじめ防止への取組や、心身の安全確保、体験活動や学校行事の充実についても、学校の取組が保護者に一定程度理解され、評価されていることが読み取れる。これは、教職員が組織的に生徒指導・教育活動に取り組んできた成果である。

２　今年度の課題

一方で、「自分の良いところがわかっている」「家庭で復習や宿題に取り組んでいる」といった項目は、引き続き課題として捉える必要がある。

自己理解や自己肯定感については、学校生活の中での体験や教師からの評価が、子ども自身の内面に十分定着していない可能性が考えられる。学習面・生活面を問わず、子どもが自らの成長や役割を実感できる場面を、より意図的に設定していく必要がある。

また、家庭学習や学校での出来事についての家庭内での対話に関しては、学年が進むにつれて難しさが増す傾向があり、学校と家庭が連携しながら支えていく体制づくりが求められる。

さらに、ICT 活用や情報発信、保護者・地域の意見を学校改善に生かす取組については、実践の充実に加え、その内容や意図をよりわかりやすく伝える工夫が必要である。

３　次年度に向けた展望

次年度に向けては、これまで積み重ねてきた「安心して過ごせる学校づくり」を基盤としつつ、子ども一人一人が主体的に考え、行動できる力の育成を一層重視していく。

具体的には、授業や行事、体験活動の中で、子どもが自分の役割や成長を実感できる機会を増やし、自己肯定感や自己有用感を高める指導を進めていく。また、評価の場面においても、結果のみならず、過程や努力を認める視点を大切にしていく。

家庭との連携については、ICT の活用や情報発信の工夫を通して、学校での学びや子どもの様子が家庭に伝わりやすい仕組みを整え、無理のない協働関係の構築を図る。

さらに、学校運営においては、保護者や地域の意見を積極的に受け止め、改善に生かす姿勢を明確に示すことで、学校への信頼を一層高めていきたい。

４　まとめ

本校の教育活動は、子どもたちの安心・安全を基盤とした学校づくりにおいて一定の成果を上げている。一方で、自己肯定感の育成や家庭との連携強化といった課題も明らかとなった。

今後は、これらの成果と課題を踏まえ、教職員が共通理解のもとで改善に取り組み、子どもたちのよりよい成長を支える学校づくりを進めていく。

令和６年度・令和７年度　学校評価アンケート（保護者対象）比較分析

１　比較の視点

本校では、令和６年度および令和７年度において、同一の設問構成による学校評価アンケート（保護者対象）を実施した。両年度の比較により、教育活動の継続的な成果と課題、ならびに学校経営の方向性について整理する。

２　学校生活に関する評価の比較

「学校へ行くことを楽しみにしている」「ルールやマナーを守って生活している」「周囲の人の気持ちを考えようとしている」といった項目は、R6・R7 を通して継続的に設定されており、学校生活の安定や人間関係の形成を重視した評価が行われている。

R6 では、まず学校生活を安定させ、安心して通える環境づくりを重視した取組が中心であったのに対し、R7 では、その基盤が一定程度定着したことを踏まえ、子ども一人一人の態度や内面の成長に視点が移行していることがうかがえる。

３　自己理解・学習習慣に関する比較

「自分の良いところがわかっている」「家庭で復習や宿題に取り組んでいる」といった項目については、両年度を通して共通の課題として位置付けられている。

R6 では、学習習慣の定着や基本的な生活リズムの確立が主な課題であったのに対し、R7 では、学習や学校生活を通して、子ども自身が成長や良さを実感できているかという、より内面的な側面への課題意識が強まっている。

これは、学校が学力面のみならず、自己肯定感や自己有用感の育成を重要な教育課題として捉える段階へと進んでいることを示している。

４　家庭・地域・学校の連携に関する比較

「学校の様子を家庭へ知らせている」「保護者や地域の意見を改善に生かそうとしている」といった項目においては、R6 から R7 にかけて、学校運営における説明責任や対話の姿勢が、より重視されるようになっている。

R6 では、情報発信そのものの充実が主な視点であったのに対し、R7 では、情報をどのように受け止め、学校改善に結び付けているかという、取組の質や姿勢が評価の対象となっている。

５　総合的考察と次年度への方向性

R6 と R7 を比較すると、本校の教育活動は、「安心・安全な学校づくり」から「主体性や内面の成長を重視する学校づくり」へと、段階的に深化していると捉えることができる。

今後は、これまでに築いてきた安定した学校生活を基盤とし、授業や行事、体験活動を通して、子ども一人一人が自らの良さや成長を実感できる取組を一層充実させていく必要がある。

また、家庭や地域との連携を継続的に図りながら、学校運営の透明性を高め、信頼される学校づくりを推進していく。

６　まとめ

令和６年度および令和７年度の学校評価アンケートの比較から、本校は継続的な改善により、学校生活の安定と信頼の確立に一定の成果を上げてきたことが確認できる。一方で、自己肯定感の育成や家庭との協働の在り方については、引き続き重点的に取り組む必要がある。

これらの成果と課題を踏まえ、次年度においても組織的・計画的な学校運営を推進していく。

学校評価に基づく改善の流れ（R6→R7→R8）

本校では、学校評価アンケート（保護者対象）の結果を、学校経営改善の重要な指標として位置付け、年度ごとの成果と課題を踏まえながら、段階的な改善を進めてきた。

令和６年度（R6）

令和６年度は、子どもたちが安心して学校生活を送ることができる環境づくりを最優先課題とし、基本的な生活習慣の定着、ルールやマナーの指導、人間関係の安定を重視した取組を行った。

その結果、学校生活全般の落ち着きや、学校への信頼感について、一定の評価を得ることができた。

一方で、自己理解や学習習慣、家庭との関わりといった面については、継続的な課題として整理された。

令和７年度（R7）

令和７年度は、R6 で築いた安心・安定の基盤を土台とし、子ども一人一人の内面の成長に目を向けた教育活動を推進した。

特に、自己肯定感や自己有用感の育成、学校生活や学習を通して自分の良さを実感できる指導を意識的に取り入れた。

また、ICT の活用や情報発信の工夫を進めることで、学校の取組を家庭や地域と共有し、学校改善に生かす姿勢を明確にした。

その一方で、自己理解の深化や家庭学習の定着については、引き続き改善を要する課題として明らかとなった。

令和８年度（R8）に向けて

令和８年度は、R6・R7 の成果と課題を踏まえ、「安心」から「主体性」へ、「支え」から「自立」へとつなぐ学校づくりを目標とする。

具体的には、授業や行事、体験活動を通して、子どもが自ら考え、判断し、行動する場面を意図的に設定し、成功体験や役割意識を積み重ねていく。あわせて、評価の在り方についても、結果のみならず過程や努力を認める視点を重視する。

さらに、家庭・地域との連携を継続的に図りながら、学校運営の透明性を高め、保護者や地域とともに子どもたちの成長を支える体制の充実を図っていく。

総括

本校の学校評価に基づく改善の流れは、単年度で完結するものではなく、R6 から R7、そして R8 へと連続性をもって進められている。今後も評価結果を真摯に受け止め、教育活動の改善に生かすことで、子どもたちの健やかな成長を支える学校づくりを推進していく。